＝討　論＝

〔これは、第74回教父研究会でのチャールズ・カネンギーサー氏による'My Life-long Adventure with Saint Athanasius'の発表に続いて行われた討論の記録です。同氏の発表は原文のまま、本号巻末に収められています〕

加藤信朗

現代の教父学界を代表するカネンギーサー氏による大変優れた啓蒙的かつ刺激的なご講演であった。ここに集われた方々すべてが、それぞれ聖霊の炎に燃え立ち、教父学の研究にさらなる意欲を抱いたことと思う。今日のご講演は非常に魅力的でかつ込み入った分野に関するものであったが、どなたからでもご質問を。

荻野弘之

残念ながらアタナシオスの作品をまだそれほどたくさん読んだわけではないのだが、今日のご講演によって、アタナシオスにずいぶん親しみを抱くことができたように感じる。『言の受肉』(De incarnatione Verbi) 第八章 p.290 2行目 (Sources Chretiennes) に関しては、idon および horon および horon,hoti が五〜六度繰り返されている点が目をひく。ご講演の中では、アタナシオスの単純で非技巧的な用語法を強調されたが、一見したところ例えばこの箇所などは非常に修辞的に思われる。アタナシオスの修辞的表現の性格を他の教父たちと比較した場合、何かコメントして頂ける点があるだろうか。

Ch. カネンギーサー

大変興味深いご質問に感謝したい。アタナシオスにおいては修辞学的特徴がしばしば指摘される。彼は聖書解釈の行為を説明するために、時として修辞学的な用語を用いる。様々な動詞、様々な用語が使用されるが、それは学校教育の伝統に由来するものである。アタナシオスが学校教育を受けていたことは、彼がプラトンの引用をおこなうことか

らも察せられる。だが彼は4世紀において唯一、司教としての神学を展開した人であったと言える。彼はオリゲネスに対して好意的であり「フィロポノス」（勤勉な）の形容辞を用いて称賛する。彼は神学的な意味でオリゲニストではないが、彼の著作にはオリゲネス的な内容が頻出する。彼はプロの弁論家という意味で修辞学者なのではない。アタナシオスを、ナジアンゾスのグレゴリオスやアレクサンドリアのキュリロスなどと比較することはできない。アレクサンドリアのキュリロスは修辞学的な文体を持っている。アタナシオスは修辞学の教育を受け、学校修辞学の伝統を受け継いではいるが、それを時折しか表に出さない。この点は特徴的であり、彼が一般的な言葉で表現するだけに、その思索の真髄に分け入るのはより困難である。

荻野弘之

「アタナシオスは聖書注解を記さなかった」と言われた。けれどもアタナシオスの作品の中には聖書からの引用が豊富に認められる。ここで思い起こすのは『ルカ福音書』一〇30〜37「よきサマリア人のたとえ話」である。そこではエリコに向かう人をめぐって三種類の人が登場する。三人とも彼を見る（idon）。だが、祭司とレビ人は通りすぎ（antiparelthen）、ただサマリア人のみが傷ついた彼に同情して（esplanchnisthe）近づく（proselthen）。例えばこの『言の受肉』のテキストなどに見られる idon, eleesas, そして synkatabas などの用語には、救済論的な文脈において「善きサマリア人」の語法からの影響を受けた用語の意識的な選択が認められるのではないか。

Ch. カネンギーサー

確かにおっしゃる通りである。ここでは『創世記』第3章の堕罪の話の中で、罪に課せられる罰を暗にほのめかす語法を指摘することができよう。だがそれは単なる引喩であって、各文にはアタナシオス特有の、思考様式における具体性を見て取ることができる。アタナシオスはすべてを具体的な現実性に引き戻して考察する。これが彼にとって「言の受肉」なのである。

泉治典

「アタナシオス研究の現状」と題された御論文(*)を拝読した。概して『アリウス派駁論』(Orationes contra Arianos)

第三巻の著者問題に関するご見解には賛成であるが、アタナシオスが第一巻と第二巻を自ら分割した意図、あるいは当初一続きの著作であったろうという推測の根拠を教えていただきたい。

（＊）当日配付された資料 The Contemporary Study of Athanasius of Alexandria's Career and Legacy"。その中でカネンギーサー氏は「アタナシオスは、『アリウス派駁論』を当初統一された一つの著作として書き上げたのち、特に現在の『第一駁論』の冒頭にアリウス著『饗宴(thaleia)』からの引用を載せ、論駁的意図をもって二つの部分（第一と第二）に分割した。さらに現在『第三駁論』とされているものは、実はアタナシオスの真作ではなく、その優れた弟子の手になるものであろう」という主張を展開している。

Ch. カネンギーサー

もしご質問に対する直接の回答になっていなければご訂正ねがいたい。『アリウス派駁論の第一、第二巻では、本質的に聖書テキストに立脚した一連の論拠が展開されている。論の配列として、アタナシオスはまず父の永遠性に対する子の永遠性を論じ、ついで1、32からの第二部において、『フィリピ書』二六ff.讃歌に見られる「ロゴスの無化」(kenosis) の意味を論ずる長い部分が見られる。これはアリウス派の聖書釈義において子の劣等性を現す部分として引用される箇所である。アタナシオスはその部分がそういう意味をもってはいないことを示す。さらに第一巻の末尾近く（1、53）からは『箴言』八22「主は、その道の初めにわたしを創られた。いにしえの御業になお、先立って」と語る知恵の言葉をめぐって議論がなされる。しかしこれは第一巻最後の10パラグラフを残して中断され、その中断は第二巻の初めにまで及ぶ。この中断は人為的で意図的なものだと思われるが、一かたまりを形成するように見える。その第二巻でアタナシオスは、まず『ヘブライ書』三2をめぐって議論をおこなう。その論調はすぐに改められ、再び『箴言』八22の包括的で精密な釈義に移行する。これが第二駁論の末尾まで続く。『アリウス派駁論』を初めから振り返ってみると、第一駁論の冒頭でアタナシオスはロゴスの永遠性について論じ、次いで『フィリピ書』第二章のケノーシスについて語る。さらに彼のテーマは神的誕生へと移行する。この移行は大変興味深い。人々が教父時代においていかに創造的であることを要請されたかは、われわ

れには想像しがたい。とりわけわれわれが感覚的にあまり創造的でなくなっているだけに難しい。もし当時の人々が当時の文化の中で創造的であったと同様に、われわれもわれわれの言葉において創造的であり得たならば、彼らが直面していた問題をどのように解決せねばならなかったか、彼らの思考の真の状況がいかなるものであったかが、もっとよく分かるだろう。

さて、アタナシオスの直接の先駆者であるアレクサンドリアの司教アレクサンドロスは『ヨハネ福音書』一18「父のふところにいる独り子である神、この方が神を示されたのである」をもって、子の神性を表す箇所として引用した最初の人物であった。このイメージには「父のふところ」という表現のうちに、母性的なイメージが含まれている。父が有する起源を説明するために母性的な象徴性が用いられているが、神的誕生を表現するこのイメージを、精緻で組織的な考察に深めたのはアタナシオスである。さてアタナシオスは、第一駁論から第二駁論へ進み『箴言』八22を論ずる際に、子の永遠性、誕生、父と同等の不変性に焦点を当てる。アタナシオスの「子に関する神学」におけるこれら三つの観点は、彼が「救済論的受肉論」へと焦点を絞ってゆく際の論拠の進め方の特徴である。ところでアタナシオスが救済論的受肉論を展開する際には、常に包括的な「語り」の方法が用いられる。アタナシオスの文体は文章が長く、従属節を重ね、かなり込み入った語りのスタイルをとる。そして動作を表す動詞が頻用される。これは実際に生起することをストーリーとして語るからである。この文体は第三巻とはまったく対照的である。第三巻に認められるのは哲学的で分析的な文体と思考様式である。もしわたしの見解が誤っていたならば、批判を喜んで受け入れたい。非常に込み入った議論であり、わたしの分析にはいささか強調しすぎた面、細かい問題に関して見落とした点もあろう。批判は歓迎したい。けれどもわたしが自説を一九七四年に発表して以来、一人も反論を立てていない。わたしの論は極めて単純なものであるが、それは文体が上述の二つの部分で非常に異なっているという理由に基づく。わたしはこれを『駁論』第三巻の‘Sonderstellung’（「特殊性質」）と呼んでいる。第三巻には、アタナシオスの著作のどこにも繰り返されることのない特異な性質が認められる。この点は、歴史的観点を重んずるわたしの立場からすると極めて興味深い問題である。すなわちもし『アリウス派駁論』

が、アタナシオスが二度目に亡命する時点（三三九～三四〇年）に記されたということを認めるとすると――この年代は一般的に受け入れられているが――、三四〇年以降彼が亡くなる三七三年までに記された著作と比較してみることができるだろう。この期間、すなわち三四〇年から三七三年にかけてアタナシオスは、その行動においても著作に関しても極めて一貫した堅固な立場を取る。彼は最後の書簡に到るまで同一の立場、同一の言語、同一の文体、同一の「語りの口調」を正確に維持する。晩年の書簡、例えば『司教アデルフィオスへの書簡』(Epistula ad Adelphium episcopum et confessorem)、あるいは『司教ヒピクテトスへの書簡』(Epistula ad Epicutetum episcopum Corinthi)、あるいは『復活祭書簡』(Epistulae paschales)に関しては、その文体は『アリウス派駁論』第一、第二駁論に認められるのと同じものであって、第三駁論に見られるものとは全く異なっている。以上がわたしの立論である。

加藤武

配付資料のなかに「アタナシオスは聖書の最も優れた活用法として、われわれが現在置かれている状況を聖書の言葉で理解するというあり方を提唱したことだろう」という一節がある。これには大変感銘を受けた。パメラ・ブライトによって訳されたアタナシオスの『詩篇解釈をめぐる書簡』(Epistula ad Marcellinum de interpretatione Psalmorum)を読む機会があったが(*)、非常に魅惑的な文体で、音楽的なものを感じた。わたしの関心は、聖書の客観的な解釈ではなく、特に読み手と深く関わった聖書解釈のあり方である。今日のご講演はこの点に関して大きな示唆を与えるものであった。

(*) Athanasius of Alexandria, On the interpretation of the Psalms, tr.by Pamell Bright, in: Early Christian Spirituality, ed. by Charles Kannengiesser, Fortress／Philadelphia 1986.

Ch. カネンギーサー

大変美しいご質問に深く感謝したい。わたしが説明しようと試みていたことを的確に言って頂いたように思う。アタナシオスはアレクサンドリアにいる病気の友人に向けて書簡をしたためている。それは『マルケリーノスに宛てた書簡』(Epistula ad Marcellinum de interpretatione

Psalmorum）と題されているが、内容はすべて詩篇に関するものであり、特に生活の様々な状況における詩篇の用い方、効用を論じている。これこそアタナシオスに特徴的なあり方であって、彼は詩篇の注解を書こうとはせず，人生の諸局面にあって詩篇の意味をいかに理解するかという観点から、励ましの書簡を書いたのである。アタナシオスにとって、聖書とは学者によって研究対象として研究されるべきものではなく、人生の具体的・直接的経験に適用されるべきものであった。聖書とは生活のための書であり、この『マルケリーノスに宛てた書簡』の中に、われわれは『詩篇』全一五〇編の素晴らしい分析を読むことができる。これは一読をお薦めする。優れた翻訳が出版されている。この中で、詩篇をめぐっての勧告において、アタナシオスが個々の状況を想定し、個々の詩篇を通していかに具体的かつ心理学的であるかを読むことができる。ここにアタナシオスの「語り」による具体的な思考様式を感じ取ることができる。詩篇の注解はオリゲネス以来、ギリシア教父たちによって数多く記されてきたが、アタナシオスのものは特に特徴あるものだと言える。アタナシオスはアレクサンドリアでギリシア風の教育を受けた人物であるが、エジプト的な思考様式を受け継いでいる。「エジプト的」とは語りの具体的な様式である。換言すればコプト的だということである。アタナシオスが生を享けた四世紀、アレクサンドリアは極めて人種的に混合した町であった。

この「具体的な思考様式」ということに関連して、『言の受肉』の神秘主義に関して一言述べておきたい。『言の受肉』はキリスト教に新しい眺望、新しい思考様式を開いた著作である。この新しい思考様式とは、本質的に「キリスト者である」ということにおいて重要なことが、ある人自身の経験において受肉を現実化してゆくことだという主張を持つものである。

『アリウス派駁論』の第一、第二巻には、同第三巻に全く存在しないものが見いだされる。アタナシオスが教会を集合的主体とみなしている点がそれである。彼が語るのは教会の声である。彼は信仰者の共同体の名において語っている。それは非常に具体性に富んだ統一体である。彼は教会を主体の集合と見なしている。個々の場合において本質的なのは、キリスト教信仰の神秘とは「現実の経験の本質を形成するのが神の受肉である」という点にあるということである。その具体的著作例として「隠者アントニオスの

書簡」が挙げられ、七通が真作として伝えられている。優れた校訂本と翻訳が出版された（一九五五）。その内容は「砂漠における体験とは神の救済のオイコノミアを現実化することにある」というものである。アントニオスは、砂漠における隠遁生活とはエジプトの砂漠の孤独へと入ってゆくことにあると説明している。それは自分自身の本性に潜む悪と戦うため、また自分の深い霊的体験へと引きこもるための体験である。アントニオスが砂漠で体験したこの経験を、アタナシオスは若い司教として、都市の教養ある市民に向けて移し替えたと言える。信仰の体験とは受肉を現実化することであった。アタナシオス自身は修道者ではなかったが、アントニウスの弟子として、礼讃者として語った。アタナシオスは生涯修道者にはならなかったが、修道者によって教育され、砂漠の体験を積んだということを証ししたと言える。

水落健治

アレクサンドリアのアタナシオスにおいては、普通、非常に思弁的で組織神学的考察をおこなった者としての面が強調される。それに対して今日のご講演では、彼の「語り」の要素が前面に出された。わたくしはこれまでアタナシオスを正統教義史の枠内で理解し、アレクサンドリアの思弁的伝統の中で把えてきた。アレクサンドリアには長い「知恵文学」の伝統があると思われるが、アタナシオスにおける思弁的要素とこの知恵文学の伝統、それに「語り」の要因を、どのような関連の下に考えておられるか。

Ch. カネンギーサー

ご指摘のようなアタナシオス理解・アタナシオス像というものは、通常の「教父学」の教科書あるいは講義において与えられるものだと思う。『言の受肉』は、そのような視点から、普通アタナシオスの初期の作品、習作的著作だとされてきた。アタナシオスがまだ神学の学生だった頃の作品と考えられてきたのである。オクスフォード教父学国際会議の創始者、クロス博士もその一人である。彼は『異教徒駁論』(Contra gentes)(*)が、聴講者たちの手記の集成ではないかと考えた。これは偏見であり、こういったアタナシオス像は彼の著作の性格に合致しない。

このようなアタナシオス理解は、そもそも十七〜十八世紀におけるベネディクト会サン・モール学派の修道士たち

によるアタナシオスの著作の成立年代決定をも支配していた。彼らは、『言の受肉』の中にアリウス派に関する言及がないことから、この作品がアリウス派論争開始よりも前に遡る作品であろうと考えた。つまりこの「沈黙にもとづく推論」(argumentum e silentio) は、『言の受肉』を三一八〜三二〇年頃の作品であると推測させたのである。さて彼らサン・モール学派の修道士たちは、同時にアタナシオスが二九五年の生まれであろうと推測した。この年代は現在、どの本にも見いだすことができるが、その論拠とするところは、九世紀のコプト語による記録である。その資料には、助祭、副助祭、読師といった教会内の階級に関して、それぞれの地位から上級に昇進するために何年を要するかが記されている。だがこの制度は四世紀には存在していなかった。だからこの資料を論拠に用いるのは時代錯誤である。けれども彼らによって、先の「沈黙による推論」の他にこの論拠が用いられた。この推定は誤っている。最近になってアタナシオスの『復活祭書簡』(Epistulae paschales) のインデックスが刊行された。その中でアタナシオスは「三一八年にはまだ三十歳になっていなかった」と述べている。そこでアタナシオスの生年を二九九年以降に設定すると、アリウス論争がアレクサンドリアで盛んになった三一八〜三一九年頃、彼は十八〜十九歳であったということになり、先の「沈黙による推論」がここに適用されると、彼が『言の受肉』を記したのは十八歳未満のことであるということになる。だがこれは全くあり得ない話である。このような作品は、十代の青年にはとても記せるものではない。そもそもアタナシオスを「卓越した組織神学者」と見なして、『言の受肉』から察せられるようなアタナシオス像を未熟な姿と考えるあり方に誤りがあると思われる。『言の受肉』から窺われるアタナシオスの姿は、彼の他の著作と比較しても一貫したものである。

さて以上との関連で、先にも触れたが、『アリウス派駁論』の第三巻に見られるような組織神学者的な側面が、昔から今日に到るまでドイツ系の「教義史」などにあっては特にアタナシオスに帰せられる傾向にある。だがこの見解には問題がある。わたしの論文が Zeitschrift fur Kirchengeschichte に六十頁以上にわたって掲載されたために、彼らは「どこかおかしい」と気づくようになってきている。だが彼らが正しい見解を抱くには次の世代を待たねばならない（笑い）。

（＊）『異教徒駁論』と『言の受肉』は元来一つの作品を構成するものと考えられている。

水落健治

「知恵文学」の伝統と、アレクサンドリアの思弁的傾向との関連をどうお考えになるのかお聞きしたいのだが。

Ch. カネンギーサー

アタナシオス自身は司教として、彼より十歳ばかり年少であった盲目のディデュモスをアレクサンドリアの教理学校の校長に任命した。ディデュモスは思弁的なオリゲネス主義者であり、その学校での内密な講義において、オリゲネスよりも思弁的な組織神学を展開した。これはアタナシオスの同意と許可があってはじめてなされたことである。だがアタナシオスは、ディデュモスとはその組織神学者的な面をまったく共有してはいない。これは興味深い点である。

水落健治

それならば、当時のアレクサンドリアではいわゆる「思弁的」傾向と「語り」の要素との間には何ら関係がなかったとお考えであろうか。

Ch. カネンギーサー

ないと思う。「教義の正統性」を考えるとき、われわれは忍耐強く考える必要がある。アレクサンドリアの司教たち、特にアタナシオスとアレクサンドリアのキュリロスに関しては、これまで正統教義を押しつける専制的な「ファラオ」として描かれることが多かった。アレクサンドリアのキュリロスに関しては何も言えないが、アタナシオスについてはこれは誤りである。キリスト教史のなかで、一致と和解のための最初の公会議を開いたのはアタナシオスである。三六二年におこなわれたアレクサンドリアでの公会議は、ニケア公会議に賛同するすべての派の一致をめざした公会議である。彼らは互いに争いあっていたが、何らかの意味でニケア公会議に賛同するメンバーであった。アタナシオスは彼らを集め議論させ、和解にこぎ着けたのである。『アンティオキアの人々へのトモス』(Tomus ad Antiochenos) は、この和解を示す公会議書簡である。『アリミヌムとセレウキアでの公会議に関する書簡』(Epistula

de synodis Arimini in Italia et Seleuciae in Isauria celebratis）は、アタナシオスの生涯の中で最も長い書簡であるが、「ホモウシオス」を受け入れないアンキュラのバシレイオスに対して和解の基盤を提供するものである。この書簡の中で、アタナシオスはバシレイオスに対し、「あなたはホモウシオスを受け入れないが、あなたの考えていることとわれわれの考えていることは同一である。わたしにはあなたと和解する準備がある」と、砂漠への第三回目の逃亡中（三五九～三六〇年頃）にもかかわらず記している。ゆえにアタナシオスにおける「正統性」とは、キリスト教思想について新たな方法で語り合うための言語を発見しうる独創性・創造性を、また異なった言語で語る人々と理解し合うための開かれた心を意味していた。わたしがアタナシオスを勉強しはじめた学生の頃、アタナシオス自身は「ホモウシオス」という言葉を用いなかったということを誰も教えてはくれず、自分で発見せねばならなかったということは驚くべきことである。もっと正確に言うならば、アタナシオスの著作の中に「ホモウシオス」という語が出てくるのは、ニケア公会議の歴史的関連性においてのみであって、それは決して神学的語彙ではない。アタナシオスは彼自身の語法・語彙を用いつづけた。だがこれは保守的ニケア派からは排斥された。なぜならアタナシオスの用語（たとえば「子は父とすべての点において類似している」'homoios kata panta'）などは、反ニケア派のアリウス派にも用いられうるものだからというのである。けれどもアタナシオスが、キリスト教史における最初の和解の公会議である三六二年のアレクサンドリア公会議に成功したという点からも、様々な人々がアタナシオスの言葉に一致と調和の場を見いだしえたということが理解できる。

水落健治

旧約聖書における知恵文学の伝統、例えば「コヘレトの書」などの要因についてはいかがであろうか。

Ch. カネンギーサー

ご質問に対する正確な回答になっていないかも知れないが、アタナシオスはご承知のように三五〇年代後半、三五七年頃に『復活祭書簡』（Epistulae paschales）を記しており、その中に彼は外典に対して正典を擁護するために、最初の旧約聖書の完全な正典リストを残している。

戸田聡

わたくしは初期キリスト教における修道制の歴史を研究中であるが、二つの点に関しておうかがいしたい。まず第一に、『アントニオス伝』以外のアタナシオスのテキストは、四世紀のエジプトの修道制の歴史に関して何らか有効な情報を提供してくれるだろうか。もう一点は、アタナシオスは普通、三五六年から三六二年まで第三回目の亡命をして「人々を避け砂漠に逃れた」と言われている。このことをはっきり述べた箇所はナジアンゾスのグレゴリオスの第二一講話『アタナシオス讃』第一九節に見られるが、砂漠の修道者たちのもとへ逃れたことについてアタナシオスは自らの著作の中で言及しているのだろうか。それをご教示いただければ。

Ch. カネンギーサー

まず第一に、アタナシオスの書簡の中には直接修道士に宛てられたものを見いだすことができる。『アムーンへの書簡』(Epistula ad Amun monachum) や『修道士たちへの書簡』(Epistula ad monachos) がそうである。そのなかでアタナシオスは、自分が彼らの保護者、公的守護者の立場にあると考えており、彼らといかに心おきなく語り合っているかを知ることができる。『アントニオス伝』(De vita Antonii) は、キリスト教古代にあって聖書に次ぐベストセラーであるが、これはアタナシオスの生前にラテン語に翻訳された唯一の書である。非常に古い二種類のラテン語訳が現存している。この著作をアタナシオスの真作ではないと考える超懐疑的な学者はほとんどいない。しかも彼らは誤りをおかしている。なぜならこの著作はアタナシオスの生前から、また彼の死の直後にも引用がなされているからである。『アントニオス伝』はわれわれに興味深い情報を与えてくれる。なぜならその一部は、この司教アタナシオスに対して修道士たちから提供された資料を基にして記されているからである。われわれは四世紀の前半における修道制に関して、アタナシオスから以上に情報を得ることはできない。だがそればかりではなく、アタナシオスの著作のほとんどは、修道士に宛てられたものである。『アリウス派論駁のための弁論』(Apologia contra Arianos) は修道士の要請に応じて記されたものである。また重要な著作のほとんどは修道士のために記されている。『聖霊についての書簡』(Epistulae IV ad Serapionem

episcopum Thmuitanum）や『ドラコンティオスへの書簡』（Epistula ad Dracontium）がそうである。これらは、アタナシオスが当時の修道制運動に関して指導的な役割を果たしていたことを推察させるものである。

さて、三五六年から三六二年にかけての彼の第三回目の亡命に関しては、まずアタナシオス自身によってその著作『亡命について』（De fuga）に記されている。同時にパコミオス修道院の生み出した著作の中に、まったく独立した記述が残されている。これは興味深い。この著作は、共住修道制の創始者であるパコミオスの生涯を記したものである。しかるにアントニオスは隠修者である。パコミオスは回心後、ナイル河畔で共同生活を始めた。パコミオスの修道院は大変栄えた。この信じがたい成功、ナイル河畔でこのような事業が栄えたことについて記した史料は、非常に多く残されている。この成功について、ある時ピーター・ブラウンがわたしに「アタナシオスの時代の修道制運動は、古代において最も成功した若者の運動だ」と語ったことがある（笑い）。パコミオスの生きた時代から約半世紀後、四世紀末には、シェヌーテがやはり上エジプトで修道院の指導者として活動した。七千人が男子修道院に、三千五百人が女子修道院に入ったという記録が残されている。これは目を見張る植民事業だと言える。さて、この「パコミオス伝」の中に、アタナシオスが彼の許を訪問したということが記されている。これがよい情報になると思う。

長らくの忍耐強く規律正しいご静聴に深く感謝したい。

加藤信朗

大変素晴らしいご講演に深く感謝したい。ここに集まった方々すべてが、またの機会に、今日のような豊かな宝庫から繰り出されるご講演をうかがいたいと感じたことと思う。時間が来たので閉会とするが、改めて感謝申し上げたい。

第七五回教父研究会（一九九五年十月八日　於聖心女子大学）

司会者　加藤信朗（東京都立大学名誉教授）
発表者　Ch. カネンギーサー
（ノートルデイム大学教授）
発言　荻野弘之（上智大学助教授）

泉　治典（東洋大学名誉教授）
加藤　武（立教大学名誉教授）
水落健治（明治学院大学教授）
戸田　聡（一橋大学大学院）

◎討論の記録については、論旨を明確にするために、多少表現を改めた箇所があります。

E・スヒレベーク著

一人の生ける者の物語　**イエス**　（全三巻）

20世紀を代表するフロンティアの神学者スヒレベークの主著。
聖書と教会の豊かな伝統に立脚しつつ、現代世界の全ての人々の問題と課題を視野に入れて、キリストの光のもとで考察し、人間の深い意味と神との出会いを見出す。

既刊　第一巻　訳者　V・アリバス／塩谷惇子　定価　4800円
既刊　第二巻　訳者　宮本久雄／筒井賢治　定価　4800円
近刊　第三巻　訳者　井原彰一／V・アリバス（1997年4月刊行予定）

新　世　社
460 名古屋市中区丸の内3－6－43　みこころセンター
TEL　052—971—3556　FAX　052—835—0365

observation was correct. Pope Shenouda explained with a big smile, in front of the two thousand Copts assembled in the cathedral, that I was wrong in claiming that Athanasius had not played a decisive role at the imperial council of 325. With an even bigger smile I dared to answer that we were both right: Pope Shenouda on the level of the devotional tradition inside the Coptic Church which emphasizes uncritically Athanasius' role at Nicaea, and me from the point of view of modern scholarship.

Such is the battle still to be fought on in Athanasian studies. Should we turn into anti-Athanasian critics because we have lost the hagiographical simplicity of past centuries? Or is there a way to combine contemporary scholarship with a strong sense for the spiritual values which made of Athanasius a great saint? If a zealous devotion inspired sincere theologians of the late fourth and early fifth century to fabricate apocryphal Athanasiana, why should not a more honest devotion guide us through our deconstructive approach and with our critical requests of today, until we feel ready to appropriate in our own understanding of Christian faith the spiritual journey of Saint Athanasius of Alexandria? This would be the title of my next and final book on this man: "Athanasius of Alexandria. The Spiritual and Intellectual Journey". I thank you for giving me your support in view of that adventure.

（＊） 本稿は1995年10月８日に行われた第74回教父研究会における配付資料の再録である。

blasphemy. Cyril of Alexandria, who was a great admirer of Athanasius and his most famous successor at the turn to the fifth century, would not have reacted differently. He was thrilled so much by what he read in pseudo-athanasian writings, that he imposed one of their phrases as dogmatic truth at the ecumenical council of Ephesus in 431. In particular, the third *Orations aganist the Arians* was quoted again in a solemn session of the next ecumenical council, in 451, at Chalcedon. From there on, if one goes through the following centuries along the official channels which quoted the authority of Athanasius down to the time of the Reformation, a thousand years later, apocryphal Athanasiana outnumber by far the bishop's authentic writings in all major traditions.

Therefore it is not surprising if we still have to complete the "clean-up" of Athanasius' literary legacy, In the end it is only at the price of such a patient clarification that we become able to discover Athanasius himself. This is crucial for me. Paradoxically too many prejudices against Athanasius rest paradoxically on the uncritical textual basis provided by ancient collections of writings devotedly enlarged in favor of him. The devotion toward the saint who continued to live like a giant of Nicene orthodoxy in the memory of the Churches allowed many abusive "improvements" added to his written work. If we try today to eliminate such pious fakes from the authentic Athanasiana, it may well be equally an act of devotion, but with more critical awareness.

Let me place here a personal memory. On December 20, 1989, I was giving a lecture on Athanasius in the Coptic cathedral of Cairo. Pope Shenouda, the Orthodox Coptic Patriarch, who with good reasons considers himself as the true successor of Athanasius, had decided to serve as my interpreter from English into Arabic. When I came to mention the improvised trip of young Athanasius with his bishop to Nicaea in 325, I could not help noticing that the comment of His Holiness was much longer than my own statement. In the question and answer period which followed I wondered if my

authors among his most active supporters, eager to present their own theological ideas as consonant with the inherited teaching of Athanasius. In a similar way today, we commonly admit the distinction between authentic letters of the apostle Paul and deutero-pauline letters, added to the former ones inside the communities created by Paul in order to update and accomodate the teaching of the apostle in the fast changing trends of their church-life.

Many questions remain unsolved about the origin and very nature of the pseudo-athanasian writings comprised in collections of Athanasiana from the first day when such collections existed. I am not trying here to answer those questions, but I would explain very briefly why they are becoming for me a crucial challenge.

First of all we should remember the popular phrase saying that one is always betrayed by one's own friends. If pseudo-athanasiana started to circulate soon after Athanasius' death in 373 the authors of such apocryphal writings acted in good conscience. They were motivated by their admiration for the late leader whom they used to call their spiritual father. In giving him a voice in the debate of their own day, even more so in letting him support their own Christology, which they considered in any case as truly Athanasian, they were paying a tribute of devotion to their hero as much as exercising theological shrewdness.

Some of the unauthentic pieces incorporated in the traditional collections of Athanasian writings were identified a long time ago, some already in the Patristic period, others during the seventeenth and eighteenth centuries, more of them only in our time. For longer than two decades I have been myself in a state of amazement, since I started to perceive a problem of that sort in studying the vocabulary and the structure of the third *Orations aganist the Arians.* For anyone who knows something about the authority of Athanasius as *the* paradigmatic defender of the Nicene Creed, to question the authenticity of the third *Orations aganist the Arians* sounds like a

historian Edward Gibbon to claim, that Athanasius, rather than Constantine's three sons, was the most qualified for ruling the empire in his life-time. Even without such emphatic appreciation the essential fact remains true, namely that Athanasius survived all his enemies, not in fighting them of his own initiative, but in enduring them to the end. This brings me to my last remarks.

3. The Bishop as a Saint

Rather than accumulating further information concerning the career of Athanasius I would be very pleased now to end this presentation in sharing with you my actual focus in the field of Athanasius studies.

It was in the early sixties, at the time when I was preparing the critical edition of *On the Incarnation*, that I started to notice what has become in a more recent past the crucial challenge which I have to face as an expert on Athanasius, I mean the critical retrieving of Athanasius' legacy. The real Athanasius, whom one has a chance to discover by genuinely approaching him through a careful study of his writing, is not necessarily the same as the one venerated in the main Christian traditions of Antiquity, of the Middle-Ages, or of Modernity.

When analyzing the oldest witnesses of *On the Incarnation,* in fact I was dealing with deliberate changes introduced into the text of that essay in order to accomodate its doctrinal content to a christological context in which Athanasius' vocabulary sounded outdated by the closing years of the century. Small additions were provided here and there which somehow updated what Athanasius had written forty or fifty years earlier. Something much more improtant of that sort was undertaken shortly after Athanasius' death: we read in the earliest editions of Athanasius' doctrinals writings, distributed in Alexandria and in places related with Alexandria, some fascinating essays which were *not* from Athanasius himself, but of unknown

capable of rethinking coherently his beliefs, not as a theoretical thinker only interested in abstract constructs. Thereby I earned in 1970 a second Ph.D in theology at the Catholic University of Paris. A more prolonged study of the *Orations aganist the Arians* led to a third doctorate in 1982, this time the "Doctorat d'Etat" in Classics at the Sorbonne in Paris, and to several publications, the latest only a few months ago, in the *Zeitschrift für Kirchengeschichte,* published in Tübingen, Germany.

Throughout these years of study I gradually discovered a person very different from the one accused of being hungry for power, I found a man who faced adversity with a remarkable endurance. Athanasius never engaged any fight on his own initiative. Not once did he provoke, by himsilf and for no reason, other bishops or officials of the emperor's administration. Accusations and measures against him took him always by surprise. His five exiles, between 335 and 365, were indeed very bad surprises, and it is the more important to notice how he reacted in such circumstances. To my astonishment I reached the conclusion that in the *Orations aganist the Arians,* despite the title given by tradition to these treatises, polemical overtones are far from being predominant. I noticed that in the long *Festal Letter* of 337 a jubilant young bishop announces to the Alexandrian church community his imminent return from his first exile without a single word of complaint or anger against those responsible for his two year long banishment. From one of Athanasius' writings to another, I verified a very firm and ever unshaked reiteration of the Nicene Creed, and a categorical fidelity to his predecessor and to his local church. But such a doctrinal and ecclesiastical steadfastness never meant for Athanasius an excuse to create any trouble for other churches or to become hostile toward the emperor.

It is true that the kind of duel between Emperor Constantius II and the Alexandrian bishop, a duel which lasted for the whole reign of Constantius, from 337 until 361, is without any parallel in the history of the Roman empire. It inspired the eighteenth century British

against the background of the Roman empire, out of the proper environment of his local church in Alexandria and his Egyptian hinderland.

In any case it is striking to observe that such a negative attitude never takes any account of Athanasius' more personal writings which are of a more spiritual and doctrinal nature.

A reason for that strange omission is due to the fact that until a recent past a critical edition was available only for the so-called political apologies, in which the Alexandrian bishop tries to explain and justify his decisions in the heat of the controversy. Athanasius' other writings were available only in older editions, for instance his doctrinal master-piece, the *Orations aganist the Arians*, or even *On the Incarnation*, whose critical edition I published only in 1973. Even the famous *Life of Antony* was published in critical edition only last year. Again Athanasius' *Festal Letters*, which he produced each year for announcing the dates of Lent and Easter, and of which important fragments are still available, and as well other Letters, or treatises in form of letters, are neglected and yet all are indispensable for understanding his personality.

I soon found myself embroiled in a controversy of a scholarly type. On one side I analyzed the documents proper to Arius and to the Arian party, which made me realize that a general agreement about these documents seems impossible to reach. A lively public discussion went on in several occasions on this matter, mainly at the international Patristic conference held in Oxford every four years, but also in California, in Germany or elsewhere. A thorough and conclusive study of the Arian documents remains a first priority, given their key-role in any critical evaluation of Athanasius' anti-Arian stance.

On the other side I became fascinated by the results of my own exploration of Athanasius' literary legacy. First, I tried to determine the bishop's personal conviction as a theologian, that is as a believer

today under the title *Orations aganist the Arians,* in Greek *Kata arianos.*

2. The Bishop as a Fighter

In facing the study of this great work of Athanasius, I plunged not only into another massive reading of manuscripts (the text of *Kata arianos* has five times the length of *On the Incarnation*), but also into the Arian controversy itself, a controversy in which Athanasius would find himself helplessly trapped for the next two decades of his life.

From 339 until exactly the 3d of November 361, the day when Constantius II died, the Alexandrian bishop remained the favorite target of a powerful coalition of clerical dignitaries and imperial bureaucrats, determined to destroy him in order to establish their own Christian empire. Theological polemics and political arbitrariness raged during those two decades in such a confusing battle, that even today the experts specialised in Athanasian historiography are often themselves exposed to confusion and polemics.

From 1965 on, with growing sadness I discovered what I must call the main characteristic of that historiography, namely that from the early twentieth century a common opinion has spread over the international scene of Western scholarship, which tends to denigrate Athanasius' motivation in the many struggles of his career. A small group of influential historians succeeded in depicting Athanasius as an ambitious politician, totally untrustworthy, whose constant obsession was to cling to power.

I noticed at least two major failings in such a view: 1) It reduplicates exactly the highly polemical bias of the accusations formulated by the worst enemies of the Alexandrian bishop, when these very enemies are supposed to be the matter under scrutiny. 2) It results in a negative evaluation of Athanasius seen almost exclusively

Christian, notably Origen in the midst of the third century, or Philo the Jew, who was contemporary of Jesus. Indeed Athanasius does not interpret scripture with their hermeneutical pattern in his mind. That pattern consisted basically in a theory of our innate capacity of knowledge. Athanasius does not play with the distinction between the literal and the spiritual senses of scripture, and he never uses "spiritual" as a term bound to a Gnostic type of philosophy.

As understood by Athanasius, scripture was a life-giving source of divine revelation, a source directly connected with the practical experience of life and faith. We are experiencing today, he would say repeatedly, the full truth of scripture. It is our turn now, in responding to the challenges which we have to face as members of the Church, to know, at our own cost, what divine revelation and salvation are all about.

Therefore the best use of scripture, Athanasius would have added, is to understand our present situation in biblical terms. The message of the Bible has nothing in common with a theoretical learning based on text-books. It is a source of spiritual power which transforms our whole condition, its life-giving truth enabling us to act as living witnesses of the gospel. With such a spiritual conviction, it is not surprising that the same Athanasius, who did not write a single commentary on scripture, is usually acclaimed by the critics as a man of the Bible. As a Christian leader, he understood the whole reality of the church, and any form of ministry in the church, exclusively in biblical terms. And this is precisely what he does in his *Orations aganist the Arians.*

To go back to that short period, from the autumn of 337 until Easter of 339, between Athanasius' return from his first exile and his dramatic departure into the second exile, we know from Athanasius himself that he was repeatedly solicited, mainly by the monks, to explain clearly what was at stake in the ongoing controversy about the Arian doctrine. His answer to such requests is what we read

against his Church.

I would like to interrupt at this point to tell you that after my theological training I was lucky enough to prepare, between 1960 and 1964, my first Ph.D. in preparing a critical edition of Athanasius's treatise *On the Incarnation of the divine Logos.* Since the seventeenth century nobody had tried the task. I read all the manuscripts carrying the text of the Athanasian essay through the centuries. These included an old Syriac version, which dates from the early fifth century, only a few decades after Athanasius's death. In comparing that old Syriac witness of *On the Incarnation* with the conventional Greek text handed down to us and printed in the *Patrology* of Migne, it was possible to evaluate the Greek with the needed precision. I must confess that I learned very much patience in reading *On the Incarnation* syllable by syllable in one manuscript after another twenty times over. I learned that nothing replaces that peculiar form of intimacy with a text given by such a thorough analysis of its handwritten witnesses. I vowed to do the same painstaking study of Athanasius' master-piece, his *Orationes against the Arians.*

In the meantime I had read all the other writings attributed to Athanasius. It was obvious that this man was not a professional writer nor was he a stylist of ancient rhetoric who would address exclusively the members of an educated elite. On the contrary he was a man with the common touch, motivated directly by the fortuitous events of his public life. When he decided to compose a formal letter or a treatise on some debated issue, he was always urged into writing by the pressure of dramatic circumstances.

Something that intrigued me more than anything else was the fact that Athanasius had apparently not produced a single commentary on holy scripture. Even more surprising the fact that Athanasius never approaches scripture in his written work with the mental attitude proper to Alexandrian interpreters, Jewish or

the monks of Egypt were on the side of Meletios. An alliance between those schismatic Meletians, who played an important role inside the Egyptian Christianity, and the episcopal supporters of Arius in other Churches outside of Egypt, was to become a serious threat for Athanasius. First, as we have seen, he was denounced by his enemies, for having accepted to be ordained when he was not yet thirty years of age. Then, as that first attempt to get rid of him failed, the same enemies called for another imperial council in 335, which was held in Tyre, in the area currently known as the Palestinian territory of Gaza. There they succeeded in having Athanasius deposed and removed from his see.

Empreror Constantine, who was not in a position to catch what was at stake in the clerical dispute, sent the young bishop into exile to "the end of the world", as Athanasius would call it, namely to the imperial garrison of Trier in northern Gaul, now in Germany. Athanasius saw for the first time snow. Actually, he spent two winters in that remote place. Emperor Constantine died soon after Pentecost of 337, and Athanasius could return home with the official blessings of Constantine's three sons.

These three sons divided the Empire into three parts, the eastern Provinces being henceforth ruled by Constantius II, who was then twenty years old. Soon the episcopal supporters of Arius's cause (Arius himself having passed away in 336) gained the favours of Constantius II and they used their power for acting swiftly against Athanasius whose return to Alexandria they could not tolerate. They choose a former disciple of Arius as a replacement for the Alexandrian see and imposed him by force through a military coup shortly before Easter 339, Athanasius escaped. He found refuge in Rome, but only after having spent several weeks hidden in the Christian quarters of Alexandria by his parishioners until after Easter Sunday. He managed to distribute a circular letter before embarking secretely for Rome, a letter which we still have and in which the bishop vehemently protests against the violence directed

bishops from Syria and Palestine offered their support to Arius and urged Bishop Alexander to reconsider his condemnation. When Emperor Constantine overruled his opponent in the east of the Empire and became sole Roman emperor, one of his first major initiatives was to convoke a general council at his summer residence in Nicaea, not far from the Bosphorus on the territory modern Turkey, for the summer of 325. With imperial power the Nicene council confirmed with imperial power the earlier excommunication of Arius, which was, and should have remained, an inner concern of the Alexandrian Church, Athanasius became bishop of Alexandria three years after Nicaea. He had served as a secretary to the late Bihop Alexander, who had probably also provided for his education. Freshly ordained a deacon, he escorted his bishop to the synod of 325 with a few other clerics, but it is very probable that, at that early stage of his career, he had never had personal involvement in the dispute with Arius.

Unfortunately, even after Athanasius's election as bishop, the episcopal supporters of the condemned priest insisted that Arius be reintegrated into the ranks of the Alexandrian clergy. They did not dare to attack directly the decision of Nicaea, which was covered by the authority of the unassailable might of the emperor, but they found other ways to undermine Athanasius's position, for instance in attacking him on the level of ecclesiastical regulations, such as the minimum age imposed for priesthood.

The position of the newly elected bishop of Alexandria was already undermined by a grave division inside the Alexandrian Church. Since the persecution of Diocletian during the first decade of the fourth century a large number of clerics refused to recognize the authority of the Alexandrian bishop. They followed a rival bishop named Meletios, a rigorist who had tried to impose himself as the replacement of Bishop Peter I of Alexandria, when the latter was imprisoned during the persecution. At the time when Athanasius became bishop of Alexandria, approximately half of the clergy and

of 298-299 or in 299. In four years we should meet for celebrating the seventeenth centenial of his birth !

It remains a mystery for me how such a young man became the head of the most important Christian Chruch of his time. Athanasius would stay in office for forty-five years, a record long tenure characterized by his steadfastness during the stormy decades of the so-called Arian crisis. Arius, who gave his name to that crisis, was a learned priest of Alexandria, who had protested aganist the preaching of Athanasius's predecessor, Bishop Alexander of Alexandria, when Athanasius himself was still a teen-ager.

Arius was a strong traditionalist, who continued to understand the Christian notion of God as elaborated before him in the Church traditions of the second and the third centuries, namely the notion of a godhead in which the Father was the supreme God including in himself the Son and the Holy Spirit. Therefore the Father alone was said unbegotten, which means eternal in the full sense of the word. The Son had a beginning, as he was precisely Son, and the Holy Spirit came after the Son.

In short, Arius disagreed with his bishop when the latter proclaimed from the pulpit: "Always is the Father, always the Son", "same Father, same Son", both equal in divinity, both eternal. For Arius, "sonship", even in deity, meant necessarily a beginning: the Son of God had a beninning, just as the whole creation has started to exist out of God's creative will. For such reasoning Arius was severely blamed inside the local Christianity of Alexandria. He was accused of suggesting that the divine saviour of humanity was himself like a creature, begotten in time, and not really God. The local storm culminated between 318 and 320 in a synod, in which Arius was declared a heretic and excluded from the Alexandrian Church.

The storm swept around the eastern border of the Mediterranean, provoking international attention, when a group of

My Life-long Adventure with Saint Athanasius(*)

Charles Kannengiesser

1. The Bishop as a Writer

Forty years ago, when I was just a beginner in theology, I embarked upon the project of reading all the sources available of Christian literature dating from the first centuries of Christianity. That is how I discovered Athanasius of Alexandria. My first encounter with him was very streightforward: I simply enjoyed reading his essay entitled *On the Incarnation of the Logos*. I admired how he was able to express central Christian beliefs in such a clear language. What he said made immediately sense to me, and I found it at once substantial, rich in thought, and prayerful. I felt myself invited by Athanasius to rethink the basic notions of my own belief in God and in divine salvation.

Some time later I learned that the best date for the composition of *On the Incarnation* was the year 335, when Athanasius was thirty-six years old. We know the date of his birth thanks to a chronological *Index* established by the Chancellery of the Alexandrian bishops soon after his death, which happened in early May 373. That *Index* claims that in 331, three years after his election as bishop of Alexandria, Athanasius had to go to the court of the emperor because some of his enemies had questioned the regularity of his election: in 328, when Athanasius was installed as bishop, he was not yet thirty years old. That accusation is not contradicted in the *Index*, which consistently focuses on chronological precision, which leads to the conclusion that Athanasius was born at the earliest in the winter